

## トランスジェンダー

2023年11月6日 産業医・労働衛生コンサルタント(京都大学名誉教授) 川村 孝

最近話題になっている「LGBT」はレズビアン、ゲイ、バイセクシュアル、トランスジェンダーの頭文字をつなげたものですが、その中の「L」「G」「B」の3つと「T」では性質が異なり、前三者は脳における性指向(誰に対して性的関心を持つか)を、最後の「T」は脳における性認識(自分の性はどちらか)を示します。トランスジェンダーは社会的な用語で、医学では「性的違和gender dysphoria」あるいは「性同一性障害gender identity disorder」と言います。要は「生殖器の形態と脳における性の認識が異なる」というものです。

多くの人々が「男女は遺伝子で決まる」と思っているようですが、遺伝子が決めるのは生殖器をつくる場所までです。実は男性の精巣も女性の卵巣も男性ホルモンと女性ホルモンの両方を分泌しています。性ホルモンの代表であるエストロゲンの血中濃度は成人男性と閉経期の女性で同程度です。男性ホルモンの代表であるテストステロンは女性では男性の10～20分の1程度ですが、卵細胞の成熟に不可欠です。したがって手術によって性ホルモン分泌能力を奪うことは、手術侵襲以外にも生体に害を及ぼします。

一方、脳が自分の性をどう認識するかは「胎生期から出生後早期に脳がどれほどの性ホルモンに曝露されたか」によって決まります。特に「妊娠20週あたりまでの男性ホルモンへの曝露」が支配的です。「妊娠中にあまり怒ると気の強い子が生まれる」という俗説がありますが、あながち嘘とは言えません。また、大豆には女性ホルモンに似たイソフラボンが多く含まれているので、妊婦は過剰に摂取しないように指導されています(サプリメントなどを使用しなければ問題はありません)。

幼年期に達したあとは脳はホルモン分泌量の影響をほとんど受けず、性意識は生殖器の有無(形成手術やホルモン剤の投与)にかかわらず生涯変わりません。出生時には将来の性意識が判別できませんので、便宜的に体のつくりで性別を仮判定しているだけです。よって生下時は「provisional male(暫定男子)」「provisional female(暫定女子)」というべきでしょう。

性の違和を感じた時点で戸籍を修正すれば、以後は戸籍どおりで一生行けるわけです。一部で懸念されている「トイレ利用や運動競技のために女性を騙る」という事態にはならないでしょう。トランスジェンダー者と非トランスジェンダー者との「L」や「G」において子どもが生まれる可能性がないとは言えませんが、生殖補助医療も行われる現代にあつてトランスジェンダー者が生物学的に子を儲けることは否定されるべきではなく、トランスジェンダー者の生殖機能をいじる必要性はないと思われます。

ともあれ、頭の中の性別は男女二つにはっきり分かれるものではなく、二峰性ではあるものの一続きのスペクトルです(添付イラスト)。性に対する指向も、淡泊な草食系からギラギラの肉食系まで連続的に分布するのです。

